

年間第5主日A

マタイ5・13-16

今日は皆さんへの質問から始めたいと思います。皆さんは、世界あるいは日本で基督教の伝道を最も妨げているものは何だと思いますか？ もちろん、この質問には、答える人によって、あるいはどこの国・地域について尋ねられたのかによってもさまざまな答えが返ってくるに違いありません。実はこの質問をされた人がいるのです。インド独立の指導者であったマハトマ・ガンディーです。ある日、一人の宣教師が、マハトマ・ガンディーに、まさにこの質問を投げかけました。「インドにおいて基督教の伝道を妨げている最大の原因は何だとおもいますか」 ガンジーの答えは次のようです。

「基督教の伝道を妨げている最大の原因は、多くのキリスト者の偽善です。多くのキリスト者は、あるべき姿で行動していません。彼らの生き方はキリストの教えからかけ離れています」。

マハトマ・ガンディーはヒンドゥー教徒でしたがキリストには大変関心を持っていました。あるところでこう言いました。「私はキリストが好きですが、キリスト教徒とその生き方は好きではありません」。

ガンディーのこの言葉は、今日の福音のメッセージを聞くときに重要なポイントになります。わたしたちがキリストに従う者としてどのように生きているかが問われているのではないのでしょうか。

今日の福音書は、「山上の説教」のつづきですが、この箇所では、イエスは多くの人々に「**あなたがたは塩である**」、「**あなたがたは世の光である**」（マタイ5.13-14）と言っています。ここで注意しておきたいことは、イエスは「**地の塩**」「**世の光**」になりなさいとも、「**地の塩**」「**世の光**」でなければならない、と教えられていないことです。すでにあなた方は「**世の塩**」「**世の光**」であると断言されていることです。

ところで、ヨハネによる福音書8章12節では、イエス様がお自身のことを「わたしは世の光である」と言われています。それでは、イエスとイエスに従う者、どちらが世の光なのでしょう。

この明らかなくい違いは、ヨハネによる福音書9章5節でイエスが自分自身について語られている箇所によってその意味が明らかになります。「わたしは、この世にいる間は、世の光である」。これは、イエスはこの世に肉体的に存在する間は、この世の光であることをしめしています。

そうすると、イエスがもはや肉体的に存在しなくなるとどうなるでしょうか。ヨハネによる福音書8章12節には「わたしは世の光である」と語られた後「私に従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と書かれています。つまりイエスに従う者がこの世の光としての役割を担うこととなります。

今日の福音書では、キリスト者のこの世での役割は、「塩」と「光」という二つの言葉で定義されています。私たちにとってこれらの言葉はどのような意味があるのでしょうか。聖書には「砂糖」という言葉は一度も出てこないことをご存知でしょうか。古来、塩は食べ物に味を与える究極の調味料でした。

塩がなければ、食べ物は味気ないものになってしまいますね。また塩は、食べ物を保存するためにも使われます。イエス様は、食べ物にとって塩に大切な働きがあるように、世界にとってイエスに従う者もそうであると言っているのです。キリスト者は、この世を意味のある場所にするためにまた、生きやすい場所にする使命を与えられているのです。どうしたら、この世界をより生きやすい場所することができるのでしょうか。その手がかかり、マルコによる福音書の一節にあります。「塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」
(マルコ9. 50)。

塩として、私たちはこの世界を少しでも生きやすい場所にするために、親しみやすく、親切で、すべての人と平和に暮らすように召されているのです。

光として、私たちは道を示すように召されているのです。光がなければ、「誰も働くことができない夜」（ヨハネ9・8）に活動するようなものです。私たちは互いにぶつかり合い、溝にはまってしまいます。しかし、「世の光」であるイエス様に導かれているキリスト者は「ここに道があるから行きなさい、ここに危険があるから避けなさい」と言うことができるのです。

光と塩がなければ、世界は非常に悪い状態になり、生きる意味が分からなくなり、生きていくことがとても苦しいものになります。光と塩があれば、世界はより安全でより良い場所になるのです。世界をより良い場所にするのは、キリスト者としての私たちに与えられた使命です。

現代において、私たちはイエスに従うものとはどのように生き、何をしたらいいのでしょうか？

第一に塩と光の働きから考えてみましょう。塩とは食べ物とは違って味をつけたり、保存したりする働きがなければ使い物になりません。もし塩が味を失ったら、それはもう役に立ちませんし、違いを生み出すこともできません。

光は、暗闇の中であっても、光の働きによって道を示すことができなければ役に立ちません。電池の切れた懐中電灯は、暗闇にいる人には役に立ちません。ですから、世の塩であり光であるということは、この世と違う使命を与えられているということです。それでは、キリスト者にはこの世と違うどのような使命が与えられているのでしょうか。ヨハネによる福音書13章34－35節でイエス様はこう言いました。「わたしは、新しいいしめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、そ

れによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。愛は、真のキリスト教と偽りのキリスト教を見分けることができる特徴的な印なのです。

第二は、塩も光も、その場の中にあって欠くことのできない働きをすることです。塩は、食べ物の中に入って内側から変化させない限り、食べ物をよい味にしたり、保存したりすることはできません。光は、暗闇に遭遇しない限り、道を示すことはできません。キリスト教は、社会や世界の現実に関わらないようにすることが道だと考えることがあります。しかし、社会や世界の現実から遠ざかることは、私たちが灯火を「升の下」（マタイ5・14）に隠していることになりかねません。社会を変えるためには、私たちは社会を作る一人のキリスト者としてそれぞれの場で生き、さまざまな課題を担っていくことです。

今日の世界に多くの闇と苦悩があるとすれば、私たちキリスト者が世の中の塩となり光となる使命が大きくあることを示しています。私たちはキリストに示された神の愛を知っている者として、今日から少しずつ変化を起こそうと決心することができます。

暗闇を呪うのではなく、ろうソクを灯すと決めることができるのです。たとえ小さなろうソクでも、暗闇の世界では助けになるのです。

今日、私たちは生きている社会の中で、キリスト者であることの本当のアイデンティティを保つことができるように祈りましょう。そして、地の塩、世の光とされていることに気づき、生きている場でどのような使命が与えられているか見出せるように祈りましょう。